

光と色彩 豊かな余韻 小出麻代・越野潤 京都で2人展

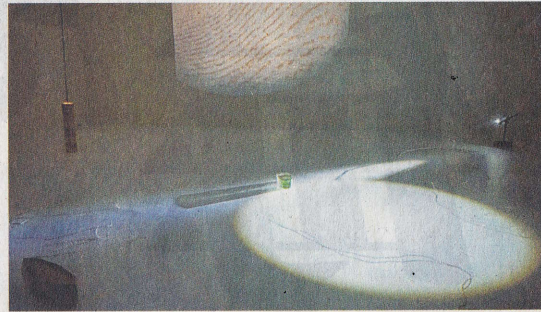
薄暗い部屋で床に広がる円形の光。その上を木の枝のようなくつもの白い線がゆるやかに走る。周囲には舟形のオブジェや円い鏡、筒状の柱が置かれ、いつか見た記憶の中の風景を呼び覚ます。壁にはさまざまな模様 of 石の表面が映し出され、一定のリズムを刻むスライドプロジェクターの音が心地よい。

本作は京都芸術センター(京都市中京区)で開催中の2人展に出品されている美術家、小出麻代の新作「むこう側から」。小さい頃から集めている石などの漂流物をモチーフに詩的な空間を生み出した。普段の生活の中で「漂流物をき

っかけに遠い時間や距離について思考を巡らせている」と小出。それは「自分が今存在していることを確かめる行為でもある」という。

別の部屋では、越野潤が色とりどりの絵画によるインスタレーションを展開。アクリルの塊を支持体とする一点一点は形の異なる長方形で、シルクスクリーンによって赤や黄、白などの単色で覆われている。マットな表面が光を閉じ込め、リズムカルな配置は空間に音楽を響かせるかのよう。「絵画を軸に何ができるか。ミニマルな表現を追求したい」と越野。色彩そのものを体験するような不思議な感覚にとらわれる。

光や石を使った小出麻代の新作「むこう側から」



光や色によって両者が生み出した空間には豊かな余白と余韻が広がり、想像の旅へと連れ出してくれるだろう。

4月8日まで。京都芸術センター(075・213・1000)。
【清水有香、写真も】